

道民カレッジ主催講座

令和7年度第3回インターネット講座

「共生社会の学び」

資 料



NPO 法人ピープルデザイン研究所 田中 真宏 氏
北ひろしま福祉会 就労センタージョブ 堀米 寿美恵 氏
合同会社ペン具 ト部 奈穂子 氏
(順不同)

道民カレッジ

北海道の生涯学習事業、道民カレッジ。

今回のテーマは「障害者の生涯学習」です。

お話を伺ったのは、NPO 法人ピープルデザイン研究所の田中さん。

障害のある人もない人も、自然に混ざり合う社会を目指して活動されています。

田中と申します。

僕は NPO の二代目の代表なので、2021 年から代表を務めています。

2012 年に NPO を立ち上げていて、須藤が NPO を設立する前からやっていた「ソーシャルプロジェクト」という、社会課題、障害にまつわる社会課題を解決していくプロジェクトに参加していました。

それをファッションとかデザインとか、アートの力で解決していこうというプロジェクトをやっていた時に、僕はファッションというものに関わるうちに参加している。

その頃はダイバーシティなんて言葉はなかったんですけど、障害者と健常者が自然に混ざり合う社会を作っていく、というステートメントを出しながら活動していて。

ただ、ファッション製品だけだと、デザインだけだと、なかなか世の中を変えられないなというところから、まちづくりの NPO を作って、2012 年に NPO を設立して、2021 年に世代に交代して、今に至るという感じですね。

須藤自身は 2002 年に、そのちょっと前に自身の息子が障害児で生まれたことをきっかけに、須藤もファッションの業界にいて、自分がいたすごく華やかなファッションの世界と、福祉の当事者になって見た福祉の世界にすごく差があって、空間に違和感があるし、何より福祉製品にデザイン性があまりないと感じていた。

じゃあ、自分が得意なことを生かして、自分の息子が大人になって自立していく中で、お金や資産を残すよりも、世の中の価値観を変えていった方が、自分の息子は幸せに生きていけるんじゃないかと思って、その世の中の意識を変えるプロジェクト、意識をデザインするというのを当時から言っていたんですけど、そのプロジェクトをスタートしたんです。

田中さんが掲げるビジョン、それが「超福祉」です。

それは「支援する支援される」という関係を超え、障害のある人が憧れを持って見られるような社会のことだと言います。

超福祉というビジョンがありまして、障害のある人が憧れを持って見られるような社会になるといいなと思っています。

障害のある人が日常の中で混ざり合う社会というのが、ダイバーシティのある社会だと思うんですけど、それよりもさらに「すごい、カッコいい」と憧れを持って見られる社会になるといいなと思って、その社会状態を「超福祉」と僕らがビジョンとして掲げています。

その超福祉を実現するために、どうしたらいいんだろうというのを、展示という展示体験で表現し続けてきたのが「超福祉展」という展示イベントなんです。

超福祉っていう感覚が一番よくわかる話は、やっぱり義手の話で。

義手って、手がないと知られないように、だいたい人の肌に近づけて、人の手の形をして、色も肌色で、質感も人肌に近いものを作ることが多かったと思うんです。

それってどちらかというと、自分の手を見せるというより、自分の手を隠すことだったと僕らは思っていて。

それってやっぱり障害を隠すということだと思うんです。

僕らの超福祉展は、自分たちが何かを作っていたわけではなくて、いろんなカッコいいものを作っている人たちがいて、それを声をかけて「超福祉展」というイベントで集結させていたんです。

その中で、すごくカッコいい義手を作っている人がいて、それは本当に漫画の世界のような、ロボットのようなデザイン性の高い義手。

あとは義手を楽器にしている人とかもいて。

それを展示した時にどういうことが起きたかという、子どもたちもたくさん来る展示会だったんですよね。

子どもたちがそのかっこいい義手をつけている人を見た時に、みんな寄ってきたんですよ。

その義手に触りたい、と。

その人もすごく素敵なお方だったので、「いいよ、触って。握手しよう」と言っていて。

子どもたちは「すごい、かっこいい」と笑顔になりながら喜んでいましたよね。

次の年には、これ大人気だからイベントとして握手会をやろう、ということで握手会をやることになったんですけど、この話が一番「超福祉っぽいな」と思っていて。

やっぱり障害のある人が、箱が一瞬にして、子どもたちの中で「障害者、手のない人」ではなくて「かっこいい腕をつけている人」というふうに、一瞬で意識が変わったというのは、すごくわかりやすい例だったかなと思います。

意識を変えるだけでなく、社会に出るきっかけを作るために行っているのが、就労体験プロジェクトです。

田中さんはこれを「社会に出るための0.5歩目の体験」と呼んでいます。

僕たちのNPOのダイバーシティのまちづくりの延長なんですけど、その柱は「四×五」の活動なんです。

五というのは対象のことで、五つのマイノリティの人を対象にしています。

それは、障害のある方、あと高齢の方、あとLGBTQという性的マイノリティの方、外国人の方、そして子育て中のお父さんお母さんです。

子育て中のお父さんお母さんは、一時的ハンディキャッパーなんて僕らは通称で呼んでいるんですけど。

この方々の課題を四つの領域で解決していく、という考え方です。

四は領域で、四つの領域というのは、モノづくり、コトづくり、ヒトづくり、そしてシゴトづくりです。

この「五×四」でいろんなイベントやプロジェクトを、今、どうだろうな、十五個ぐらいやっているんですけど、その中の一つが就労体験プロジェクトになります。

就労体験プロジェクトは、本当に障害のある人が働く場自体が少ないのはもちろんなんですけど、何より「晴れの舞台」というか、人前に出て働くことがすごく少ないと思っているんですよね。

あと、スポーツとかエンターテインメントと関わる仕事が全然ないなと思っています。

その中で、まずこういう非日常の働く体験を経験してもらうことが重要なんじゃないかと考えました。

基本はあくまで体験なので、よく言っているのは「社会に出る一歩も踏み出せない人のための0.5歩目の体験」です。

とりあえず、自分がちょっとでも興味や関心を持ったり、楽しい、行ったことのない場所に「働く」ということをテーマに、ちょっと出てきてみようよ、というものです。

今はスポーツスタジアム、JリーグとかBリーグとか、プロサッカー、プロバスケットボール。

あと北海道では音楽フェスなどでもやったりしています。

田中さんは東京を拠点としながらも、旭川や函館など地方での展開に力を入れています。

そこには地方ならではの課題への気づきがありました。

旭川で結構衝撃的な体験をして。

就労体験に参加しに来た六十歳ぐらいの方がいたんです。

年齢は正確には聞いてないですけど、高齢の方で。

でもその方に聞いたり、支援者に聞いたりすると、「六十年間、今まで外で働いたことがなかった」と言うんですよ。

僕は結構衝撃を受けて。

六十年間、外で働いてない人って、そんな機会がないことってあるんだ、と思ったんです。

障害のある方は選択肢がないと言われてはいますが、東京はまだある。でも地方都市はもっとない。

この就労体験を地方都市で広げてみると、東京よりはやっぱりない。

さらに地方都市から地域に広げてみた時に、もうその差がさらに開いて、ほとんどない、という状況になってくるんですね。

そこに僕は気づいて、衝撃を受けました。

そこから、なるべく地方でもこの就労体験をやりたいと思っています。

今は道内で言うと、函館でも行っています。

違いを価値に変え、誰もが混ざり合う社会へ。

田中さんの活動は、特別なイベントから日常へと広がろうとしています。

超福祉展のタイトルって「2020年、渋谷。超福祉の日常を体験しよう」だったんですよ。

そこから一貫していることは、東京で啓発的な大きな花火は上げるんだけど、そこからどう日常に落とし込むか、ということが何より大事だということです。

日本の中の日常に、僕らの活動とか思いをどう落とし込んでいくか。それが一番大きなビジョンなんじゃないかと思っています。

北海道北広島市。

この地で八十年近い歴史を歩んできた福祉法人があります。

かつては閉鎖的なイメージもあった福祉施設ですが、近隣にエスコンフィールドが誕生したことで、周辺環境は一変しました。

福祉施設って、閉鎖的なイメージありますよね。

私が二十七年前にここに入るとき、今はきれいに建て替わっていますが、当時は古い入所施設がありました。利用者さんが逃げないように鉄格子があつたりして。

男子棟、女子棟みたいなのがいくつかあって、本当に平屋の建物がポンポンと建っているような感じでした。

見学に来た時に、隣の富ヶ岡（地名）の建物が古いままで。

私が入った翌年ぐらいに建て替わったんですけど、「鉄格子あるんだ」と思って。

隣の共栄（地名）は建て替わっていて、今の状態に近かったんですけど。

そういう時代でした。

もう平成でしたけど、「大丈夫かな、私、こういうところで働けるかな」と思いました。

それが一番最初の衝撃でした。

こんなふうになんか変わっていくなんて思っていなかったですし、もちろん法律などいろいろな流れの中で変わってきたんですけど。

現在この場所は、就労継続支援 B 型事業所として、利用者の自立を支えています。

大切にしているのは、一人一人の歩幅に合わせた並走です。

働く事業所には A 型と B 型の二種類があります。

A 型は雇用契約を結んだ上で、ある程度決まった時間や条件のもとで働く形です。

私たち B 型は、そこを目指すために職員と一緒に並走して仕事をしていく、そういう位置づけです。

時間だったり、やることだったり、もちろん毎日来られない人もいます。

その人に合わせて、足りない部分を職員が補ってという形で

ここから A 型を目指す方や、一般就労に進む方もいらっしゃいますし、ここを利用しながら人生を楽しむという選択肢もあります。

来所する方々によって、支援する角度はさまざまです。

支援する方々によって気をつけるところは変わっている。

仕事をお伝えした時に、「はい、わかりました」と返事だけはきちんとできるけれど、実は理解していない方もいたりします。

調子がいい時はできるけれど、その日の気持ちによって集中できなかったり、仕事が苦手だったり。

そういう方にはポイントごとに声をかけたり、役割を変えてみたり、その日の調子や特性によって関わり方を変えています。

三年前から本格的に始まったアート活動。

それは単なる作業を超え、利用者の心に大きな変化をもたらしました。

Yukiko さんもその一人です。

もともと絵を描くのが好きで、人に見てもらいながら、その日によって少し緊張しておとなしくなったりすることもあるんですけど、それでもやりたいことはやり続ける。

大丸とか無印とか、まだお客様の前では二回しか経験がないんですけど、本当に好きなものには集中し続けられる。とても関心していますし、逆に羨ましいなと思いつつ見えています。

共に考え、共に成長する。

開かれた福祉の現場から、新しい感性が今日も生まれています。

利用者さんと一緒に考えたり、いろいろすることによって、自分も一緒に成長できる、知識をもらえる仕事だなと思っています。

働くこと、そして人生を潤すこと。

地域に開かれたこの場所から、誰もが自分らしく輝ける未来を描き続けています。

札幌市で放課後等デイサービスを運営するペングアート。

小学生から高校生までの子どもたちが創作活動に取り組んでいます。

ペングアートとは、児童福祉法に規定された「障害児通所支援事業」になります。

放課後とつくぐらいなので、子どもたちの放課後の時間を大事にしようというところですね。

放課後等デイサービスは、放課後に子どもたちがやってきて、そこで「療育」をする場所です。

療育というのは、教育と療養の「療」を合わせた言葉で、福祉分野で使われている言葉です。

代表のト部さんは、社会福祉士として働く中で、作品づくりの時間が持つ深い価値に気づきました。

もともと私は社会福祉士という資格を持って、施設で働いていたんですね。

そこで皆さんと絵を描いたり、ものを作ったりする余暇の時間がありました。

その時に、作品を作ったり絵を描いたりする時間が「なんて尊いんだろう」と実感したんです。

ただ、福祉施設の仕事だったので、なかなかそれだけに注力することができなかった現実がありました。

それならもっと、この絵を描いたりものを作ったりする時間を突き詰めたいと思って、一度学び直しをして、その後自分で立ち上げました。

ペングアートでは、表現に自信が持てない子どもでも、自分の思いにたどり着けるよう「ガイド」という独自のサポートを行っています。

絵を描いたりものを作ったりすることって、体のいろいろな部分に影響していると思うんです。

目でよく見る、理解する、指先を使う。

そして作品を通してコミュニケーションも生まれます。

作品を通してお話もできる。

もちろん何もなくても創造性があふれる子もいますが、表現に自信がない子もいます。

そういう子たちにも、表現の素晴らしさ、楽しさを知ってほしいという思いがあって、アートガイドを用意しています。

最近では絵画だけではなく、舞台表現にも活動を広げています。

子どもたちの日常の言葉や動きそのものが、輝く表現へと変わります。

もともと舞台美術のお声がけをいただいて、子どもたちと作品を作って舞台美術にすることは何度も経験してきました。

その経験の中で、子どもたちが話している言葉や動き、そのすべてが表現だなと感じたんです。

そうした日々の言葉や動き、声が表現となって、多くの人に見てもらって、それが自分に返ってきて自信になっていく。

そんなふうになったら素敵だなと思っています。

いろんなことを想像しながら、「こんなことがあるかもしれない」「こんな人がいて、こんなふうに楽しんでいるのかもしれない」「困っているのかもしれない」と考えること。

それは一人一人ができることだと思います。

社会全体を変えることは簡単ではないかもしれないけれど、隣にいる人が困っていたら手伝えることはできると思うんです。

すべての人がそう思えるようになれば、それはきっと（未来は）広がっていくんじゃないかなと思っています。